それぞれが納得した進路選択を。学内に広がるキャリア支援課の取り組み

相模女子大学

（神奈川県相模原市）

日本における女子の高等教育が始まった明治33年、相模女子大学が創立した。以来、女性らしさと知性を併せ持つ、自立した女性の育成に力を注いできた。同学キャリア支援課では、悔いのないキャリアを歩んでほしいとの願いから、さまざまにキャリア支援を展開しており、それらの取り組みは学内に広がりを見せている。相模女子大学キャリア支援課にお話を伺った。

キャリア支援課がある「マーガレット本館」。同課は1階にあり,低学年の学生もよく訪れる

電話やメールのマナー指導 まずは〝名乗る〟必要性から

相模女子大学は創立から100年以上の歴史を誇る伝統校である。「高潔善美」を建学の精神とし、〝清楚でやさしい女性らしさ〟と〝知性に裏付けられた勇気と強さを併せ持つ自立した女性の育成〟に力を注いできた。その一方で、近年は、豊かな発想で社会と地域に貢献する人材育成も目標に掲げ、さまざまな取り組みを行っている。

この目標を具現化した取り組みの一つが、平成24年に導入した「さがみ発想講座」である。柔軟な発想力を養うことを目的とし、複数の講師によりさまざまな発想法を指導している。地元企業との共催で「さがみ発想コンテスト」も開催しており、具体的なテーマに取り組むことで、実践力も身に付けさせている。昨年度は女子サッカーチーム「ノジマステラ神奈川相模原」の運営母体である株式会社ノジマステラスポーツクラブの協力で、「ノジマステラ神奈川相模原が相模原で誰からも愛されるチームになるにはどうすればよいか」をテーマに、最終選考代表6組がアイデアを発表した。

同講座ではコンテストに備え、企画書作成やプレゼンテーションの指導も行っている。企画書やプレゼンテーションの指導は、もともとキャリア支援課で行っていたが、「さがみ発想講座」や「さがみ発想コンテスト」の導入によって、発想法からその実践に至るまで総合的な授業展開が可能になった。

キャリア支援課が独自に行っていた講座が、ゼミや正課授業として導入されたものは多い。ビジネス実務マナー検定3級講座もその一つである。昨年度、大学1、2年、短期大学部1年を対象とした正課授業「ビジネス実務総論」で、ビジネス実務マナー検定3級を取り入れることとなった。

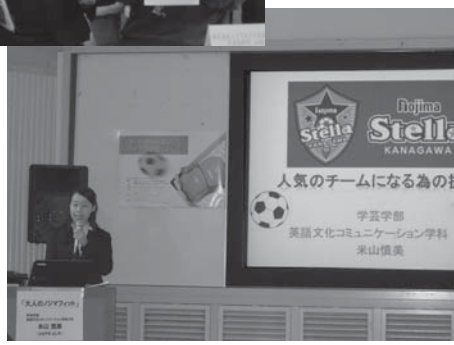
「ビジネス実務マナー検定の学習は、学生同士での常識と、一般社会での常識のずれを認識するよいきっかけになります」と話すのは、授業を担当している小泉京美（きょうみ）先生である。

ビジネス実務総論ではビジネス実務マナー検定3級取得を目標としているが、就職活動にも

(左から)キャリア支援課の山本聡幸課長,
学芸学部英語文化コミュニケーション学科の小泉京美准教授,
キャリア支援課の渡邉雅史係長

学内で開催した「さがみ発想コンテスト」。柔軟な発想力やプレゼン能力を養う。ビジネス実務マナー検定を受験した柏木さん(前列左から3人目)も参加した

学芸学部英語文化コミュニケーション学科4年の柏木泉さん(左)と人間社会学部人間心理学科4年の金本理子さん



関わる電話やメールのやりとり、封筒の書き方なども指導している。特に封筒の書き方については宛て名や発信者名をどこに書けばよいか知らない学生が多く、実技を通して書き方を覚えさせている。これ以外に、多くの学生に共通しているのは、電話やメールのマナーが身に付いていないこと。小泉先生は学生の傾向と指導についてこう話す。

「教員に欠席の連絡をする際、『今日は授業休みます』と用件のみを伝えてくる学生がとても目立ちます。そのような学生に対しては『どちらさまですか』と返し、名乗るのが当たり前だと気付かせるようにしています」。

授業で覚えたつもりでも日常生活で実践させるのは難しいのが現状だという。そのため授業以外でも、学生のマナーで気になるところがあれば、時間を惜しまず指導に当たっている。

「小さなころから携帯電話を持たされて育ってきた世代ですから、名乗る必要性を感じていません。自宅の電話を取る機会もないため、お客さまや外部の人と話すときのマナーを知らない学生が多いのです。最近はこのような傾向が顕著に現れています」と小泉先生。

親は一番身近にいる大人ではあるが、子どもとの連絡は携帯電話を使う。子どもが用件だけ伝えてきたとしても、それがビジネスの場面ではマナー違反であることには気付きにくく、家庭に指導を任せることはできない。

「だからこそ社会に送り出す側の大学が、その役割を担う必要があるのです」(小泉先生)。

2級の学習で臨機応変な応対を身に付ける

3級の学びを深め就職対策にも活用するため、キャリア支援課では「ビジネス実務マナー検定2級講座」を行っている。ビジネス実務マナー検定試験が実施される時期に合わせて開講するため年に2回しかないが、受講者は多く、モチベーションは非常に高い。

学芸学部英語文化コミュニケーション学科4年の柏木泉さんと、人間社会学部人間心理学科4年の金本理子さんは3年生のときに2級講座に参加した。柏木さんは就職活動に備え、基本的なマナーだけでなく臨機応変な応対を身に付けたいと受講した。

「3級に比べ柔軟な考え方が求められるので難しかったのですが、テキストだけでは要点がつかみにくい内容を学ぶことができてよかった」と振り返る。講座では実技演習も取り入れられ、特に名刺交換のマナーなど、テキストの解説だけではイメージしにくい内容も、講座でカバーすることができたと手応えを語ってくれた。

金本さんは、アルバイト先で学んだ接客応対を見直そうと受講。検定の学習を通してさまざまな気付きがあったと話す。

「アルバイト先でやっていた接客には、独自のやり方も含まれていたのだと気付きました。検

最新事情㉝……相模女子大学

昨年度,全学共通科目「ビジネス実務総論」で
ビジネス実務マナー検定を導入した

定の内容はどこでも通用するスタンダードなもの。状況に合わせた応対ができるようになるためにも、基礎を学べてよかった」と語る。

二人は受講後、それぞれ過去問題を繰り返し練習した。その努力が実り、見事合格。現在は就職活動の真っただ中である。今後の目標を聞くと、しっかりした口調でこう答えてくれた。

「ビジネスマナーの知識は入社後に最も発揮されると思います。臨機応変に動けるよう頑張りたい」(柏木さん)。「検定で学んだことも生かしながら、その企業に合った応対方法も学んでいきたい」(金本さん)。

納得のいく進路選択ができるよう支援する

キャリア支援課ではビジネス実務マナー検定講座だけでなく、さまざまな講座や就職関連の話題を、最適な時期を見計らって案内している。このようなきめ細かい支援ができるのは、徹底した支援プログラムを構築しているからである。支援プログラムは大きく二つある。大学1、2年を対象とする「低学年支援プログラム」と大学3年、短期大学部1年後期を対象とする「就職支援プログラム」だ。

低学年支援プログラムでは、入学式直後のキャリアガイダンスから始まり、自己分析や基礎学力講座、1daysインターンシップ、女性ゲストを呼び多様な生き方を知る女性総合講座などを定期的に開講している。

キャリアガイダンスは学校生活での心得や卒業後の進路についての意識付けを行っている。キャリア支援課の渡邉雅史係長はキャリアガイダンスの必要性についてこのように話す。

「学生生活に期待を膨らませている入学生は水を差されたような気分になると思いますが、卒業後の進路を意識して過ごすか過ごさないかで、3年生になったときの行動に大きな差が生まれるのです。キャリアガイダンスでの意識付けは非常に大切です」。

就職支援プログラムでは、長期インターンシップや面談を実施。面談では学生一人一人の就職活動の状況を確認したり、その過程での悩みなどを共有し、一緒に対策を考えたりする。面談は大変な時間を要するが、「こうしなさい」といった上から目線の指導はしない。同課の山本聡幸課長はキャリア支援課の果たす役割についてこう語ってくれた。

「キャリア支援課では、就職にこだわらず学生一人一人が納得した進路を選び、卒業していってほしいと願っています。我々ができるのは、あくまでも〝支援〟。学生の声に一生懸命に耳を傾け、一歩踏み出せるよう背中をポンと押してあげることが、就職支援課の役割であり使命だと思っています」。

同課があるマーガレットホールは、全面ガラス張りの開放的な建物。その親しみやすさも相まって、3年生だけでなく1、2年生も足を運ぶ姿がよく見られるという。

「3年生の面談や面接試験練習は私たちのいるフロアで行っていますから、ここにいるだけで就職活動の雰囲気を感じることができます。1、2年生が私たちに話し掛けてくることはないですが、3年生になった自分をイメージするには最適の場所。学生のモチベーションアップにつながっています」と山本課長。今後はどのような展開を考えているか。山本課長はこう答える。

「今後もさまざまなジャンルの講座を行っていきたいと思っています。講座に参加してみれば、自分に合うものや好きなものが見えてくるはず。学生たちが充実した人生を歩んでいけるよう、今まで通り、学生の目線に立った支援を続けていきたいと思っています」。